

第2幕 「でい」に込める魂

「芸能」という名の 地域文化



人形の頭は左右にしか動かない。また、作りがシンプルなため、動きが制約され、細かい動きはできない。しかし、だからこそ魂を込めることができるという。

語り太夫は、男女の声色を見事に使い分ける。「どうかお役人さま、せめて子らに一目会わせて……」そして太夫は肩を震わせ、涙声ともに熱演。眼鏡をとり、目じりを拭って、ふたたび語り続ける。人形遣いは、その繊細な動きを表現する。その様子を見て、もらい泣きする人も多いという。一座は、「でい」と呼ばれる人形に「魂」を込める。

眺楽座 代表

ふじお・たかし
藤尾 昂さん
(71歳・原)

子どものころから親しみ、一座の荷物運びを手伝ったことがきっかけで、36歳のときに座員となった藤尾さん。一座で人形遣いを務めている。

演技中、人形遣いは縁側の下を模した幕の陰に隠れている。人形遣いはその姿が客席から見えてはいけない。そこで、尻を床面につけたまま、足を滑らすようにして動く。常に人形の顔と対面して操るので、客席の方には背を向けている。幕下は想像よりも狭く、その中で複数の人形遣いが、不自然な姿勢で重い人形を操る。また、移動にはお尻の筋肉も使うため、見た目よりも重労働だと藤尾さん。

「人形は後ろに反ってしまふと「死に体」となってしまいます。常に前かがみになるよう、基本を大事にしています」。

三本の細竹を操作し、人形の心の内の表現に努める。お客さんの反応は、背を向けていても分るといい、背中を拍手やすすり泣きを聞いたとき、何にも代えがたい喜びを感じるという。

「説教源氏節は、代々受け継がれてきたもの。続けていくのがわたしたちの使命です。若い人が関心を持ってくれて、座員が増えてくれたらうれしいですね」藤尾さんはそう話す。

涙を誘う芝居は、座員の融合で生まれる

説教源氏節は、語り、三味線、人形遣いの三位一体の芝居。一体を三人で操る人形浄瑠璃とは異なり、頭、右手、左手を一人で操る。頭は左右に振れるが、目も、口も、手指も動かない。素朴な作りだ。

舞台装置にも工夫を凝らし、何枚にも重ねた襖絵を次々と左右に開いて行く「八反返し」は一座の名物。正面後ろで回転する「廻し」や裏返すことのできる「返し」の装置もあり、約20通りにも舞台は変化していく。

現在、演目は30数曲、段数にして100段以上になるが、「八反返し」と共に演じられる「佐倉宗吾郎」や「石井常右衛門」は特に人気がある。

一座は、語り3人、三味線3人、人形の使い手8人、その他お囃子数名で成り立ち、毎週月曜日の夜、民俗芸能伝承館に集まり、稽古に励んでいる。

「涙を誘う芝居というものは、一人だけが頑張ってもできるものではない。語り、三味線、人形遣い、お囃子の各自が、それぞれを信頼して、自分の役割を演じているからこそ生まれるものです」と藤尾さんは話す。

—Interview—

1月29日、さくらぴあでの公演を見た方に、お話を伺いました



のだ・えいこ
野田 栄子さん

さくらぴあの会報で知り、いつか見てみたいと思っていて、楽しみにしていました。素朴な人形で、生活感があり、身近な感じを受けました。今まで地域で守られてきた文化だという印象を受けました。これからも、ずっと続けてほしいです。



もりつぐ・あゆこ
森次 鮎子さん

初めて公演を見ましたが、想像していたよりもよかったです。太夫さんが声色を変えて話すので、誰のセリフかがよく分かり、楽しめました。歴史ある芸能を今まで続けてこられたということは、廿日市の財産だと思います。また、見たいと思っています。

外題 佐倉宗吾郎 仕置き申し渡しの段

百姓の困窮を見かねて直訴したために捕らえられた宗吾郎が、妻や幼い子どもたちと共に極刑を言い渡される悲痛な場面を描く。無慈悲な役人に子どもの命乞いをする親子の情に涙する観客も多い。



人形遣い

観客に背を向け、人形と向き合い、1体の人形を1人が操る。舞台裏は想像以上に狭く、低い。お尻は床につけたまま、足を滑らすようにして動く。人形の胸に付けた胸差しを左手に持ち、指で首を左右に動かす。人形の両手を操る2本の竹は右手で扱う。



八反がえし

一座が誇る演目の一部で『御殿』の場に用いられる。襖を幾重にも重ねて吊り、囃しに合わせてその襖を左右に開けていくというもの。背後から鮮やかな絵柄が次々に現れ、もうそろそろ終わりか、との予想を覆し、これでもかとはばかりに開いていく。

